

保健室の誘惑

作 T i r a

「やばいよ。練習に遅れちゃう！」

教室の窓は全て開放され、グラウンドの向こうに見える、蒼く茂った木々から蝉の声がけたたましく聞えている。

「ほら、教室の隅まで綺麗に掃きなさい」

「はい」

全ての机を教室の後ろに移動し、十人程の生徒達が掃除をしている。チョークで白くなつた黒板を綺麗に拭いている生徒や、床を掃いている生徒、そして開いた窓の淵に足を掛け、外側のガラス窓を拭いている男子生徒の姿があった。

今日は月に一度の大掃除をする日になっており、二年の竹塩相子も最後の授業を終えた放課後、こうして教室の掃除当番をしていた。

「ねえ男子達。もうちょっと早く掃除してよ」

「五月蠅いな。じゃあお前が全部掃除しろよ」

「出来る訳ないじゃない。私、部活があるから早く終わらせたいのっ」

「俺達、別に部活サボつても怒られないし。……っっていうか、これってサボつてる訳じゃないからな」

「ああ。教室の掃除っていう大義名分があるんだ。綺麗に掃除しなけりゃならないからさ。ねえ先生」

「そうね。急ぎたいのは分かるけど、掃除はしつかりとして欲しいわ。月に一度だけだからね」

先生の言葉に、相子は膨れっ面で強く箸を握り締めた。

壁に掛けられた時計を見ると三時四十分。練習が始まるまで二十分しかない。まだ十分以上は掛かるだろうから、更衣室で着替えて体育館に入ろうと思えば、相当急がなければならなかった。

相子は二つに短く束ねた髪を揺らしながら、必死になって床を掃いた。男子生徒に割り当てられていた机の移動も率先して行い、ガラス窓を拭いて汚れたバケツの水も取り替える。額に汗を滲ませながら頑張る姿を見ていた先生が、彼女に声を掛けてきた。

「竹塩さん。もう部活に行つていいわよ」

「えっ」

「他の皆よりも、十分に頑張つていたら。女子バスケットで、もうすぐ練習試合があるのよね？」

「あ……。は、はいっ」

「え。竹塩だけずるいよ」

「そんな事無いでしょ。あなた達がやるべき事も率先して頑張つてくれていたんだから。そのくらい、自分でも分かるでしょ。いいわよ竹塩さん」

「あ、ありがとうございますっ。それじゃあお先っ！」

他の女子生徒達は、慌てて教室を出てゆく相子を笑いながら見ていた。

「あと五分しかない。急がなきゃっ！」

走つてはいけない廊下と階段を早足で進むと、体育館の隣にある女子更衣室まで一気に駆ける。そして、息を切らせながら更衣室の扉を開くと、目の前に一人の女子生徒が立っていた。白い体操服に九部丈のスパッツ姿。相子よりも頭一つ、背の高い彼女は息を切らせながら入ってきた相子を見て、軽く微笑んだ。

保健室の誘惑



「竹塩じゃない。今日は遅かったね」

「あ……。井川先輩、こんにちは」

相子は頬を赤らめた。

「すごい汗。走ってきたんだ」

「はい。教室の掃除が長引いてしまつて」

「そう。皆、もう体育館に集まつているから、竹塩も早く着替えて。時間が無いよ」

「はいっ」

彼女の促された相子は、急いでロッカーを開くと、体操服に着替え始めた。

「先に行つてるから」

「はい。すぐに行きますっ」

相子は勢い良く制服を脱ぎ、急いで体操服に着替える

と、体育館へ走つた。

むせ返るような熱気の中、男女のバスケット部が来週の土曜日にある練習試合に向け、汗を流していた。

（先輩にパスしなきゃ）

そう思いながら、相子は両手でボールをパスした。バスケット好きの彼女は小学生の頃からクラブに入っていた事もあって、同学年の部員よりも早くレギュラーになれた。そして、三年の先輩達と同じように試合に向けた練習を行っているのだ。

百六十センチと他の部員に比べると高くは無いが、ジャンプ力は女子バスケット部の中ではトップクラス。そんな彼女の憧れが、先程女子更衣室で会った副部長の井川穂波だ。

百八十センチの身長から長い手を伸ばし、華麗にジャンプしながらシュートを決める。肩ほどまでの茶色い髪が後ろに流れ、引き締まつた横顔が見えた瞬間、相子はときめいた。

だから相子は穂波にパスし、シュートを決めるシーンをいつも見ていたと思つていた。穂波に好意を持つ男子生徒もいるが、彼女は自分よりも背の低い男子と付き合う気は全く無いらしい。男子バスケット部やバレーボール部なので背丈のつり合う者もいるが、彼女が「Yes」と答える容姿を持つ生徒はいなかった。そんな穂波だから、相子としては男子に取られない安心感を持つていたが、同時に女性同士という立場上、彼女への憧れを恋に変えられない事も承知しており、切なくも歯痒い思いをしていた。もし自分が容姿の整つた背の高い男性だったら、穂波は付き合つてくれるだろうか。普段は少し厳しく接する彼女をベッドの上で抱きしめ、相子の執拗な愛撫に女性らしく悶えてくれる。逆に相子の全身を愛し、「二度と離さないわ」と言ってくれる。穂波とは先輩と後輩よりも深い関係になりた

い。そんな事を妄想する日もあった。

今日は特に綺麗に見える。額に軽く汗を掻きながら舞つようにシュートする穂波に、相子は心を奪われた。彼女の近くでプレイしたい。その気持ちが集注意力を乱した数秒間の空白。

「危ないっ！」

一人の女子が声をかけた。しかし、相子は振り向くことすらできなかつた。「きゃっ」という驚きと共に、背中に衝撃を感じ、床に倒れ込んだ。その後、自分が倒れた時よりも余程大きな音を立て、女子が隣に倒れた。

ハツとして隣を見ると、穂波が仰向けになつて倒れてい

た。

「い、井川先輩っ！」

驚いて体を擦ったが、眼を瞑ったまま彼女の表情は変わらなかつた。

「頭を打つたのね。脳震盪を起こしているだけだから大丈夫よ。直に目を覚ますから心配しないでいいわ」

保健医の吉沢先生は「用事があるので少し席を外すわ」と相子に任せ、保健室を出て行った。動揺していた相子

も、吉沢先生の言葉に胸を撫で下ろし、落ち着きを取り戻していた。しかし、自分がすっかりと周りを見ていなかったために起きたトラブルにショックを受けていた。

「私が練習に集中していなかつたからこんな事になつちやつたんだ。ごめんなさい、井川先輩」

相子はベッドで仰向けに寝ている、意識のない穂波に眩きながら、横にあるパイプ椅子に腰掛けた。白い体操服の胸元が規則正しく上下に動いている様子を見て「ふう」とため息をついた。少し光沢のある、青い九部丈のスバツツから伸びる足がとて長く感じる。

「私も井川先輩みたいに、背が高く綺麗だった良かったのに。きつとシユートだって華麗に決められるんだ」

彼女の全身を眺めた相子は、ベッドの足元にある毛布を胸元まで被せた。よく考えてみると、これだけ長い時間、一緒にいた事なんてなかつた。不謹慎ではあるが、相子は近距離で居られる、この一時を幸せに感じていた。何も話し掛けてくれなくても、こうして一緒にいる事ができる。そして穂波の顔を見つめ続けることが出来るのだ。

「綺麗だな……」

しばらくの間、穂波の顔を眺めていると、保健室の扉を

開く音がした。吉沢先生が戻ってきたのかと思つたが、開いた扉から現れたのは男子生徒だった。

「蒼山君？」

「なんだ。竹塩、いたのか」

「どうしたの？」

「えっ。……竹塩は何してるんだよ」

「私は吉沢先生に頼まれて井川先輩のそばにいるの」

「じゃあ俺が代わってやるよ」

扉を閉めた彼は、パイプ椅子に座っている相子の隣に立った。彼は男子バスケット部の生徒で、相子と同じクラス。男子でありながら、身長が百六十センチに満たないため、やる気はあるが順番が回ってこない。未だ、一度も練習試合に出場したことが無い、数少ない部員の一人だ。

「いいよ。私がいるから」

「いいって。俺がいてやるよ。お前は練習試合に出るんだ。練習して来いよ」

「いいの。私が井川先輩を怪我させたんだから」

「怪我つて言つてもたいした事、無いんだろ？」

「そうだけど……でも、どうして蒼山君が？」

「それは……うん。どうしようか」

「どうしようかって？」

「ま、別に竹塩がいても構わないか」

蒼山は手に持っていたペットボトルを相子に見せた。

「何それ、ジュース？」

「ああ。でも、ただのジュースじゃないんだ。ゼリージュースって言つてさ。ま、これ以上は見てからのお楽しみって事で」

「ど、どういう事よ」

「服を脱ぐから覗くなよ」
「えっ」

ベットボトルのキャップを開けた蒼山は、ベッドの反対側に移動しながらボトルを押すようにし、ゴクゴクと飲み始めた。ゼリージュースという名前が付いているとおり、ボトルの自身はゼリー状になっている様だ。

青色のジュースを飲み干した彼は、ベッドを覆うためのカーテンを半分ほど閉め、相子に隠れるようにしながら体操服を脱ぎ始めた。

「や、やだ。何してるのよ」

「だから服を脱いでいるんだって」

「どうして服を脱ぐのよ。ねえ蒼山君っ」

脱がれた体操服や短パンが床に脱ぎ捨てられてゆく。そして、トランクスがカーテンから見えた瞬間、相子は顔を横に向けた。

「ちよ、ちよっと……。は、裸になったの？」

ほんのしばらくすると、脱いでいる音が聞こえなくなつた。

「俺の姿、見えるか？」

「えっ？」

半分ほど閉められたカーテンの向こう側から聞こえているのではない。その隣側の空間、ちょうど目線と同じ辺りから聞こえているようだ。よく見れば、空気が揺らいでいるように見える。更に目を凝らすと、薄っすらと人の様な形が見えた。何かがある。そう思った。

「俺、ゼリージュースで透明人間みたいになっているんだ」

「と、透明人間!？」

誰もいない空中から声が聞こえる。強いて言えば、彼が飲んだゼリージュースの極々薄い青色が残った、人の影があるという感じだ。しかし、そう言われなければ絶対に見落としてしまうほど透明になっている。

「な、何するのっ」

「いいから見とけって」

透明人間と化した蒼山はベッドに上がると、目を凝らしながら見ている彼女の前で、仰向けに眠っている穂波に覆い被さつた。

「ちよっと蒼山君っ。な、何を……」

声を掛けたが、それ以上の言葉が出てこなかった。不思議なことに、蒼山の体は毛布に染み込むよう埋もれてゆき、完全に見えなくなつてしまったのだ。

表情の無かつた穂波の眉が歪み、頭を横に倒した。まるで何かから逃げるように、毛布の中で体を動かしている。

「うっ……。あっ」

閉じていた淡いピンクの唇が少し開き、何か言葉を発しようとしている様に思えた。

「い、井川先輩？」

心配した相子が声を掛けると、少し険しい顔をしていた穂波の瞳がゆっくりと開いた。

「あ……。先輩」

数回瞬きし、天井を見ていた彼女がゆっくりと上半身を起こした。肩まで掛かつていた毛布が落ち、体操服が露になる。その二つの大きな膨らみを眺めた穂波はニヤリと笑うと、体操服ごと両胸を掴み、何度か揺らした。



「うおつ。すげっ！ 胸だ」

「え？」

「軟らかいなあ。それにこの腕、スベスベだよ」

「い、井川先輩？ 大丈夫ですか」

「肩に重みが掛かるっっていうか……おお！」

穂波は体操服の襟元を両手で引つ張ると、鼻の下を伸ばしながら覗き込んだ。白と緑のストライプが入ったブラジヤアの谷間に、薄っすらと汗を掻いている。

「すげえなあ。やつぱり女の体なんだ。じゃあこっちも……」

今度は足を蟹股に開き、青いスパッツの股間を撫で始めた。彼女は興奮している様で、妙に鼻息が荒い。

「やつぱり無いや。この、のっぺりした感じがエロいよ」

「井川……先輩」

目の前で行われる異常な行動に相子は動揺した。頭を打ったせいで、おかしくなってしまったのだろうか。

しかし、穂波は相子に視線を合わせると、ベッドから立ち上がり、上から見下ろすようにして話し掛けてきた。

「これが身長、百八センチの眺めか。やつぱり高いよ。これくらい身長があれば俺だって余裕でシユートを決められるのにさ」

「えっ？ お、俺って……」

「見てみるよ、この腕の長さ。それに足だってこんなに長いんだ。掌も大きいっっていうか、指が長いんだな。竹塩もこれくらいの身長があればもっと上手くなれるのにさ。この体が羨ましいだろ」

「な、何言ってるんですか？」

「分からないか？ 俺だよ俺。蒼山だよ」

「あ、蒼山……君？」

「見ただろ。俺が井川先輩に入り込んでゆくところを」

「あつ……」

「あのゼリージユースを飲んだら、体が透明になるんだけど、その状態なら他人の体に入り込むことが出来るんだ。何ていうか、乗っ取る感じかな。だから、井川先輩の体は俺のモノになったわけ」

「う、うそっ。そんな事……。い、井川先輩なんですよ？ わざとそんな風に言っているんですよね」

穂波の口から出た言葉が信じられない相子は動揺し、少し声を荒げながら問いかけた。

そんな相子に穂波はニヤニヤと笑い、「別に信じなくてもいいんだけど、俺がやる事に一々口出ししないでくれよ。折角、気を失っている間に井川先輩の体に移ったんだ。今なら何をしても覚えていないだろうから、この体で楽しませてもらわなきゃな」と、またベッドに上がって

徐に胸を揉み始めた。

呆気に取られながら見ていた相子は、嬉しそうに胸の弾力を確かめる穂波に「ほ、本当に蒼山君が……の、乗り移っているの？」と尋ねた。

「すげえ。俺ってマジで井川先輩の体を操っているんだよな。この声もたまんないよ。うっ、はあ。だんだん乳首が硬くなってきた」

彼女の問いを無視する穂波は、体操服の裾から潜り込ませたしなやかな手で、ブラジャーごと乳首を摘んだ。

「うっ。やつぱり乳首が気持ちいいっ。女の乳首ってこんなに気持ちいいんだ」

「や、やだ……」

白い体操服の生地をいやらしく盛り上げ、乳首を弄る穂波の姿に相子は赤面した。普段の穂波ではありえない行動。そして、奇妙な男口調に妙な興奮を覚える。それにしても、何ていやらしい手の動きなのだろう。体操服が大きく蠢き、彼女の胸が弄ばれている様子が伺える。

膝を立て、体操座りのような体勢で乳首を探る穂波は、切ない吐息を漏らしながら眉を歪め、その快感を堪能しているようだった。

「はあ、あつ……はあ」

「ね、ねえ……あ、蒼山君。も、もう井川先輩の体で遊ぶのはやめてよ」

「おや？ 俺だって事を認めたんだけどもさ、こうして直接乳首を弄るとすげえ気持ちいいよな。竹塩もこんな感じ一人でエッチするのかわ？」

「なつ！ へ、変な事聞かないでよっ」

「へへ、してるんだ。女っていいよな。こんなに気持ちいい体を持っているんだから。俺なら毎日、いつでも弄ってみたいよ」

まるで穂波に言われているようで、更に恥ずかしくなる。

「お願いだから井川先輩から離れてよ。先輩が可哀想じゃない」

「本人が気絶している状態で乗り移っているんだから、俺が何をしても全く覚えてないって言っただろ。気にするなよ」

「そういう問題じゃないでしょ。井川先輩、そんな事したなんて思っただけだから」

「俺がやりたいからやっているんだ。ごちゃごちゃ言わず

に、竹塩は練習に戻ればいいだろ」

「そんな事出来ないっ。私が居なくなったら、もっと酷いことをするんでしょ」

「酷いことって何だよ？」

「そ、それは……。酷いことは酷いことよ」

「もしかして、男とセックスするとかわ？」

「……し、知らないっ」

「それもいいよな。折角女の体になっているんだ。男とセックスして楽しむのも悪くないな。このまま亮の所にも行くか」

穂波が笑いながら体操服を脱ぎ捨てた。ブラジャーに包まれた大きな胸が上下に揺れると、相子の眉が歪んだ。

「だ、だめっ！ 大事な井川先輩の体でそんな事、させないからっ！」

「大事な井川先輩？ それってどういう事だよ」

「あつ……。な、何でも……。ない」

「……はは、そんな事か。なるほどなあ。だからずっと井川先輩のそばにいたいんだ」

「ち、違う。勝手に変な事を想像しないで」

「変な事って何だよ？ 竹塩、お前って井川先輩の事が好きなんだろ」

「違うのっ。私はそんなつもりで言ったんじゃない」

明らかに動揺する相子に、蒼山は穂波の顔に慢心の笑みを浮かべた。

「それならそうと、早く言えよ。今は俺が井川先輩の体を動かしているんだぜ。これがどういふ事か分かるか？」

保健室の誘惑

口に手を添えたまま視線を合わせた相子に寄り添った穂波は、耳元でそっと囁いた。

「井川先輩が竹塩の望みどおりになるって事だよ」と。

その小さく囁かれた言葉に、相子の目が泳いだ。彼が穂波に乗り移り、自分勝手に体を操っている時から、心の奥底で密かに感じていた小さな欲望。それを蒼山は、穂波の声を使って刺激した。何も言わず、俯いてしまった彼女に、蒼山が追い討ちを掛ける。

「竹塩が望むなら、井川先輩の体を自由に触らせてやってもいいんだけどなあ。何なら、俺が井川先輩に成りすましてやるうか」

「い、いや。お願いだからそれ以上は言わないで。さっきも言ったでしょ。勝手に体を使うなんて、井川先輩が可哀想だって」

「それって、お前の本心じゃないよな。ほんとには井川先輩とイチャイチャしたいんだろ？ この体を触りたいんだろ？ 正直に言えば」

「だから言ってるじゃないっ。井川先輩が可哀想だって。何度も言わせないで」

「竹塩、お前って面白いな。井川先輩が可哀想だと言いながら、触りたいんだろっていう問いは否定しないんだ」

「ち、違うつ。触りたいなんて思っていないし、イチャイチャしたいなんて思ったことも無いっ」

「このチャンス逃したら、二度とこの体を触ったり、イチャイチャする事は出来ないんだぜ。それでも否定するか？」



「だ、だからそういう事を言わないで」

穂波がベッドの上で片膝を立て、腕を乗せて見つめ返してくる。相子は、その視線を見ることが出来なかった。

「こつちを見ろよ」

「嫌っ」

「いいから見ろって」

「嫌よ」

「そうか。じゃあ……」

穂波はもう一度体操服を着なおすと、髪を整えて相子を見つめた。

「竹塩、私を見なさいっ！」

「えっ」

少し大きな張りのある声。そして、彼女が普段使っている命令口調に驚いた相子は、瞬間的に顔を上げ、穂波を見返した。

「出来るじゃない。しっかりと私を見なさい」

「えっ？ えっ？」

「何を驚いているの？」

「あつ……。そ、その……」

「ねえ竹塩。私の上に来なさい」

真剣な眼差しで見つめる穂波がベッド上で両足を伸ばし、太ももの上を手で軽く叩いた。

「ちよ……。え？ ど、どうなってるの？ 蒼山君？」

「誰よ、蒼山って」

「だ、だから蒼山君……なんでしょ？」

「何？ 蒼山って誰なの？ 男子生徒の事？」

彼女の少し怒っているような表情に相子は萎縮し、「いえ、何でもありません」と答えた。

「早く来なさいよ。何時までも待ってあげないわよ」

「あつ。は、はい」

慌てて靴を脱ぎ、ベッドに上がった相子は、戸惑いながらも穂波に促され、彼女に背を向けた状態で太ももの上に女座りをした。

「竹塩って軽いのね」

「そ、そんな事無いですけど。あ、あの……」

「何？」

「そ、その……」

本当は蒼山君なんでしょ？

蒼山君が井川先輩の真似をしているだけなんでしょ？

お願いだからそんな事しないでよ と、言いたかった。

しかし、もし本人なら怒らせてしまっただろうし、こうして穂波と密着している自分が決して嫌ではなかった。

いや、むしろ

「い、井川先輩。もう大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫よ」

「そ、それなら……。皆が心配しているから練習に……戻りませんか？」

「竹塩はどうなの？」

「えっ？」

「あなたは練習に戻りたいの？」

背中越しに耳元で囁かれると、体が震えた。そして穂波の両手が相子の腰に宛がわれ、ゆっくりと腹部を抱きしめる。その行動に、相子は鼓動を高ぶらせた。例え穂波の意思でなくても、蒼山が成りすましていたとしても嬉しかった。

「わ、私は……。やっぱり練習に戻った方がいいと思いま

す」

「本心とは裏腹な言葉を口にする。しかし、彼女の手は抱きしめてくれる穂波の手に添えられていた。それは体から引き離そうとするものではなく、彼女の手を触りたいという欲求から来ている行為であった。」

「そう。じゃあ手を離して、私から下りてくれない？」

「えっ……。は、はい」

「口ではそう答えたものの、なかなか手を離すことが出来ない。穂波の長い指に、自分の指を絡ませていたい。お尻から伝わる、穂波の温もりを感じていたい。そんな事を思っていたのだ。腹部を撫でていた手が移動し、相手の胸に宛がわれる。その手が乳房をゆっくりと揉み始めると、相手の体が小さく震えた。」

「ねえ竹塩」

「は、はい」

「可愛いわね。私の事、好きなんですよ」

「えっ。そ、そんな……」

「いいのよ。竹塩の気持ち、受け取ってあげるわ」

「い、井川……先輩？」

「もつと素直になりなさい。私の事を好きだと言って」

「そ、それは……」

「嫌いなもの？」

「そんな事無いです。私、井川先輩の事が……」

「私の事が？」

「あ、あの……」

「掌に汗が滲んだ。大好きな人に、これ以上の言葉を言うなんて恥ずかしすぎて出来ない。そう思っていると、穂波の手が体操服の裾から入り込んできた。」



「あつ！」
「言わなくてもいいわ。その代わり、大人しくしていなさい。分かった？」
「せ、先輩……。んっ」
相子の手を置き去りにした穂波の手が、体操服の中で胸を掴んだ。相子の背中に密着した穂波は、彼女の肩越しに体操服の襟元を覗き込んだ。襟元の隙間に、胸を揉む手が見え隠れしている。
「ほら、私の手が竹塩の胸を揉んでいるのよ。体操服越しにでも分かるでしょ」
「は、はい。先輩」
「どう？ 私に胸を揉まれて」
「は、恥ずかしいです」
「でも嫌じゃないでしょ」
「……はい」
「んふふ。可愛いわね。もつと揉んであげる」
「あつ、はあつ」
「感じてるの？」
「そ、そんな事……。ないです」
「そうかしら？ 乳首、勃起してるじゃないの」
「あんっ！ 井川先輩っ」
穂波は、相子の体操服の中でブラジャーをせり上げ、勃起した乳首を摘み始めた。大好きな先輩である井川穂波に胸を弄られると、相子の理性は尽く崩れてゆく。
「あつ、はあ、あつ」
「乳首を弄られるの、気持ちいいでしょ」
「はあ、はあ。あつ……。んっ」
「竹塩って、すごくエッチなんだね」

「そ、そんな事、言わないで下さい」
「どうして？」
「だ、だって……。は、恥ずかしいです。あつ……」
穂波が乳首を弄りながら、首筋に愛撫を始めた。全身の力が抜けた相子は、彼女に凭れかかり両腕を垂らした。
「あつ、あつ。い、井川……。先輩」
「首筋が敏感なんだ。耳は？」
「ひゃんっ！ ああんっ」
耳に息を吹きかけられた後、耳朶を舐められたり、耳の中に舌を入れられた。相子はビクビクと体を震わせながら、穂波の愛撫に酔いしれた。もし吉沢先生が保健室に戻ってきても続けて欲しい。こうしてずっと穂波に可愛がられていたい。頭の中でそう思った。
いやらしく蠢く体操服の生地が大人しくなると、その膨らみは、下へと降りて行った。
「こつちはどうなっているの？」
「えっ。あつ！ そ、そこはっ」
相子の赤いスパッツのゴムが引っ張られると、穂波の手が入り込んできた。ショーツの内側へ侵入した細い指が下腹部を降りようとすると、相子は慌てて太ももを閉じた。
「だ、だめです。それ以上は……」
「どうして？」
「だ、だって」
「足を開いて」
「恥ずかしい……」
「ここまで来て、恥ずかしいなんて言わないでよ。ほら、早く足を開いて」
「でも……。あつ！」

穂波が両膝を立てると、太ももの上で女座りしていた相子の足が不意に開いた。更に穂波は、立てた膝を左右に開き、相子の足を強制的に大きく開かせた。

「これで弄りやすくなった」

「や、やだつ。あつ、ああつ！」

慌ててスパッツの上から股間を押さえたが、中に侵入した穂波の手を制止することは出来なかった。

生地を盛り上げながら入り込む細い指が陰毛を掻き分け、陰唇の中にめり込むと、皮の剥けていないクリトリスを刺激する

「ああつ！ だ、だめつ」

「すごい。乳首弄っていただけなのに、こんなに濡れてるんだ。やっぱり竹塩つていやらしいんだね」

「やあ」

大好きな穂波に股間を弄られ、いやらしい言葉を掛けられる事が恥ずかしくてたまらない。穂波と一緒に居る事が出来るのは嬉しいが、急展開に羞恥心を抑えきれず、両手で顔を隠してしまった。

スパッツの生地に指の形が浮かび上がり、股間を弄っている様子が伺える。時折、同じ場所が膨れたり萎んだりしているのは、穂波の指が膣の中に入ったり出たりしているのだらう。

「グチヨグチヨじゃない。分かる？ いやらしい音が聞こえているわ」

「あつ、はあ、はあ。あつ、あつ、あんつ」

両手で必死に顔を隠し、喘ぎ声を漏らす相子の耳にも、自分の股間から聞こえる水音は届いていた。彼女が妄想していた、穂波の指で掻き回されるシーンが現実のものとな

り、体が自ら喜んでるようにも聞こえる。

「私に弄られるのがそんなに気持ちいいんだ」

「あつ……んんつ。んんつ、あつ」

「ねえ、何か答えてよ」

「はあ、はあ。あつ、あんつ」

「答えないなら、もう止めるわよ」

「はあ、はあ……」

スパッツの中で蠢いていた手を止めると、彼女は相子の背中に胸を押し付けながら囁いた。

「私とイチヤイチャしたかったんじゃないの？」

「うつ……。はあ、はあ」

「気持ちいいって言つてよ」

それでも相子は恥ずかしいのか、両手で顔を隠したまま返答しなかった。

「ふん。それじゃ、明日から竹塩の事を無視しようかな。別の子に練習試合、出してもらってもいいんだけど。私が先生に言えば、すぐに交代させられるんだけど」

その言葉に、相子はビクンと体を震わせた。

最高潮に達した羞恥心と、酷な言葉を言われた相子の目に涙が溢れる。両手で顔を隠しながらすすり泣く彼女を見て気まじくなつたのだろうか。まさか泣くとは思っていなかった蒼山は、穂波の声で「じよ、冗談だよ。そんな事をする筈無いし。な、泣くなよ」と、濡れた股間を再度、弄り始めた。

それでも相子はすすり泣いているので、今度は彼女をベッドに寝かせ、穂波が着ていた体操服等を全て脱ぎ、彼女に覆いかぶさるように抱きしめた。

「ほら、お前の好きな井川先輩の体。好きに触っていいか

ら」

「……酷いよ。井川先輩に成りすましてあんな事を言うなんて」

「わ、悪かったよ。そんなつもりで言ったんじゃないんだ」

「蒼山君が乗り移っていたって、私には井川先輩にしか見えないんだから」

「だから悪かったって。泣くなよ。この体、好きに触っていいからさ。ほら、触りたかったんだろ？」

相子が顔から手を離すと、全裸になった穂波が心配そうな表情で見ている。そして、初めて見る穂波の裸体はとても美しく思えた。あれだけ運動しているにも拘らず、体つきは嫉妬するほど女性らしく、お椀型の胸もセクシーだ。

そんな彼女を見て、また鼓動が高鳴る。恐らく、穂波の全裸を見たのは女子バスケ部の中でも相子だけだろう。しかし、彼女の口から出るのは、蒼山の男口調。それが自然と違和感があり、嫌に思えた。

「……井川先輩に成りすましてよ。蒼山君じゃ、嫌だよ」

「わ、分かったよ。井川先輩を演じればいいんだろ。……ごめん竹塩、酷いことを言って。今度は竹塩が私の体、好きに触っていいよ」

そう言つて、蒼山は穂波の体を仰向けに寝かせた。すると相子は頬に伝っていた涙を拭き、毛布で全身を隠しながら穂波の体に覆い被さつたのだ。

「はっつ！」

穂波が仰け反つた。毛布で見えない胸が、相子の口内で弄ばれている。乳首を吸われ、舌で転がされると自然と体が震えた。自らの手で弄るよりも遥かに気持ちがいい。蒼

山は穂波の体が発する快感に蕩けそうになった。

相子が執拗に胸を愛撫する。まるで母親の胸にじやれる子供のよう吸つては甘噛みし、舌で転がした。

「ああっ！ あっ、は、はあ。はああっ！」

気持ちよすぎて、我を忘れそうだ。毛布ごと、相子の頭を抱きしめた穂波の腕が、ビクビクと痙攣する。

自分が井川穂波を感じさせている。そんな感覚に捕らわれた相子は、お腹から下腹部を愛撫した。そして、無防備な下半身へ移動すると、陰唇に舌を這わせた。

「んああっ！」

穂波が一段と大きな喘ぎ声を漏らした。先輩の膣から溢れる愛液の味を楽しみながら、舌を使ってクリトリスの皮を剥き、そのまま吸い付けてくる。毛布で愛撫されている状態が見えないところも、蒼山を興奮させた。穂波の体が発する女性の快感は留まる事を知らず、彼を虜にした。

「ああっ。そ、そこっ……す、すこっ……ああっ」

何も言わずに愛撫を続ける相子に、穂波の頭が左右に揺れた。このシチュエーションを見れば、迷わずムスコをしようとしているだろう。しかし、穂波の股間から湧き出る快感は、男のそれとは異質で桁外れな気持ちよさであった。

「あっ、あっつ。す、すこっ……いつ。あっ、はあ、はあ、はあ、はあっ」

あ。そんなに舌で弄られたらっ……は、はあっ」

相子は自分がされたら気持ちがいい様に、穂波の股間を弄ると、穂波の股間から愛液が迸つた。こんなに感じてくれているんだと思いつながら、二本の指を穂波の中に挿し込むと、生温かくて柔らかい肉壁が迎えてくれた。

「ふああっ！」

穂波が、一層喘いだ。先輩の体を好き勝手に弄る優越

感。例えクラスメイトの男子が乗り移っていても、この体は井川穂波本人のものなのだ。普通では絶対にあり得ない夢のような体験をしている。相子は夢中で愛撫を続けた。「あつ、あつ、ああつ。ちよ、ちよと待って……くれよつ。はあ、はあつ。な、何か……くるっ！」

背中を仰け反らせ、シーツを強く握り締める穂波の体は、絶頂の瞬間を迎えようとしていた。津波のような極上の快感を、蒼山は強制的に与えられる。

「ふああつ。あ、あ、あ、ああつ。あうつ、あつ。はあつ、はあつ、あああつ。イ、イクツ！ イクうっつ！」

蒼山は一瞬、頭の中が弾けた様な感覚を覚えた。そして、穂波の体をビクビクと震わせ、初めて味わった女性の絶頂を全身で表現した。

「はあつ、はあつ、はあつ……。ああ〜」

膠着していた体の力を抜き、大きく深呼吸すると、相子が上下に動く胸元に擦り寄ってきた。

「……どう？」

「はあ、はあ、はあ。す、すげえ……。これ、気持ち良すぎだ。女ってこんなに気持ちよかつたんだ」

「まだ井川先輩でいてよ」

「分かつてるけど、ちよと待ってくれよ。まだ股間がジンジンしてる」

「井川先輩と、こんな事が出来るなんて思わなかった。ちよと嬉しかったりして」

「ふう〜。じゃあ今度は……」

しばらくすると、ベッドが規則正しく軋み始めた。そして二人の喘ぎ声も同じようなりズムで聞こえる。

「あつ、あつ、ああつ。井川先輩っ」

「はあ、はあ、あつ、あつ」

二人は長さの違う足を絡めあいながら、互いの股間を擦りつけあっていた。滑り気を帯びた股間から、二チ二チと粘りのあるいやらしい音が聞こえてくる。蒼山は穂波の体を使い、女性の快感を貪るように楽しみ、相子は妄想していた穂波とのレスブレイに興奮し、二回ほど絶頂を迎えていた。

「はあつ、はあつ。あつ、あつあつあつ。ああつ」

「あん、あんつ。あつ、あつ。先輩っ。ま、またイツちゃう！」

「あつ、あはつ。わ、私もっ！」

相子が三回目の絶頂を迎えたとき、穂波の体も同じように絶頂を迎えた。額から汗を流しながらベッドに横たわり、火照った下半身の余韻を楽しむ。

「はあ、はあ、はあ。井川先輩の体、最高に気持ちいいよ」

「私も。井川先輩とこんなに愛しあえるなんて信じられない。もつと先輩と一緒にいたいよ」

「俺も、もつとやりたいけど、そろそろ時間的にヤバくないか？ 部活が終わる頃だし、吉沢先生も帰ってくるかもしれない」

「……そうだね。ねえ蒼山君。いつまで井川先輩の体に乗っかっていられるの？」

「シオンベンするまで。シオンベンしたらゼリージュースが出ちまうから、体から離れることになるんだ。そう言えば、シオンベンしたくなってきたな」

「ゼリージュースってもう無いの？」

「どうしてさ」

「それは、その……」
「ははくん、分かったぞ。竹塩、お前も井川先輩の体に乗
り移りたいんだろ」
「そ、そんな事ないよ。でも……一度、先輩みたいに背が
高くて綺麗な体になってみたい気がする」
「……分けてやるうか。ゼリージュース」
「えっ」
「実はまだ何本か持っているんだ」
「そ、そうなの？」
「分けて欲しいか？」
「……う、うん」
「それじゃあ交換条件って事で」
「交換条件ってどういう事？」
「それはだな。ゼリージュースを分けてやる代わりに、竹
塩の体で遊ばせてくれよ」
「私の体で……。私に乗り移るの？」
「いや、そうじゃなくてさ。竹塩が井川先輩の体に移り移
る前に、コピーさせてもらうんだ。実はゼリージュースつ
て種類があつてさ。赤色のゼリージュースを飲むと他人の
体をコピー出来るんだ。だから、まず俺が竹塩の体をコピ
ーして、その後、竹塩は井原先輩の体に乗っ取ればいいん
だ」
「そ、そんな事が出来るんだ……」
「ああ。俺が竹塩に。そして竹塩が井原先輩になるんだ」
「ほんとに出来るの？」
「信じないのか？」
「……ううん。信じる」
「じゃあ決まりって事で！」

こうして蒼山は穂波のまま体操服を着ると、相子と共に
女子トイレに入り、小便をした。一旦、自分の体に戻った
後、赤色のゼリージュースを飲んで相子の体をコピーす
る。そして相子に青色のゼリージュースを飲ませ、まだ意
識の無い穂波に乗り移らせたのだ。

穂波の体を手に入れた相子は、その背の高さとスタイル
を堪能し、彼女の口調を真似して楽しんだ。そして蒼山
は、コピーした相子の体でもう一度女性の快感を楽しんだ
のであった。

「自分の体とエッチするのって、変な感じ」

「さつきは俺が井川先輩になつていたんだな。まあ、立場
が逆転したって感じが。ここなら、もう誰もこないだろ」

「そうだね……」

「さてと、じゃあ俺は竹塩の真似をするから、竹塩は井川
先輩の真似してくれよ」

「うん、分かった」

「それじゃあ……。井川先輩、私とエッチしてください」

「いいわよ。私が竹塩を可愛がつてあげる。クスッ！」

誰もいなくなつた体育館の倉庫。二人は互いに成りきり
ながら、薄暗い中でレスプレイを楽しんだのであった。

保健室の誘惑……おわり

今回使用した挿絵は、らんおう様に「テックアーツの
3Dカスタム少女」を用いて作って頂きました。
らんおう様、どうもありがとうございました！